

朝来市における生物多様性の現状と課題について

アンケート・ヒアリング・タウンミーティングから把握した、各主体(中学生・市民・市民団体・事業者・有識者)の生物多様性に対する意識と課題について、以下に整理した。なお市民については、市民アンケート、地域自治協議会へのヒアリング、タウンミーティング参加者の意見を統合して整理した内容である。また、既存資料から抽出した朝来市の生物多様性に係る課題も合わせて整理した。

1. 中学生

1) 生物多様性に対する意識

【肯定的な意見】

- 自然への満足度
 - 朝来市の自然環境に対して 87.4%が「満足している」と回答しており、大半の中学生は地域の自然に対して肯定的である。満足している理由としては、「自然が多くて空気や水がきれい」「景色がきれい」といった点が多く挙げられていた。
 - 「自然豊かで自慢の故郷だから」「都会とは違い自然と触れ合えるから」といった、郷土愛を伺える意見も見られた。
 - ⇒ 中学生の満足度(87.4%)は、市民の満足度(69.2%)を大きく上回っていた。市民は、特に「管理不足による里山や田畑の荒廃」といった管理上の問題に懸念があるのに対して、中学生は現状の自然の豊かさに満足していることが伺えた。
- 自然を感じる場面
 - 自然の良さを感じる場面としては、「川などの水辺で遊んだり、景色を眺めたとき」(64.3%)が最も多く、次いで「公園など、身近な緑地に出かけたとき」(48.8%)であった。
 - ⇒ 市民では、「川などの水辺で遊んだり、景色を眺めたとき」の選択率は 48.8%、「公園など、身近な緑地に出かけたとき」の選択率は36.0%であり、市民よりも川や公園などで遊ぶ機会が多いことが、選択率の高さにつながったと考えられる。
- 大切にしたい場所
 - 円山川(86.7%)や古城山(竹田城跡)(52.3%)への関心が高く、これらの場所は中学生にとって、地域のシンボルとして認識されていることが伺える。
- 保全活動への関心
 - 参加したい保全活動として、中学生は特に「屋外でのふれあい体験」(41.9%)を重視しているほか、「屋内での自然に関する知識を深める機会」(23.3%)、「(休日の活動を含む)体力を使う作業」(11.4%)も、市民よりも高い選択率であった。つまり、保全活動やイベントへの参加については、市民よりも中学生の方がより関心が高いことが見てとれる。
 - ⇒ 一方で、「普段の生活の中でできる内容」(46.2%)の選択率も高く、無理の無い範囲で活動に取り組みたいという意見も主流である。

- 希少野生生物への認識
 - 朝来市の自然の魅力として、オオサンショウウオ(ハンザキ)、コウノトリといった希少種が生息していることが挙げられており、朝来市の象徴的な生きものとして認識されていることが伺える。また、これらの種は授業で生態等を調べてみたい生きものとして、多く挙げられていた。

【否定的な意見】

- ゴミのポイ捨てと水質汚染への懸念
 - 満足していない理由として、「ゴミのポイ捨てや不法投棄」を選択する意見が多く、地域社会における環境へのマナーに対する懸念が伺えた。
- 管理不足による景観の悪化
 - 円山川の河川敷や通学路の「雑草が伸び放題」であることや、放置された草木に対して、「汚い」と感じる意見が見られた。
⇒市民でも、同様の管理上の問題として「管理不足による里山や田畑の荒廃」が挙げる意見が多かった。中学生・市民共に、自身の生活と密接に関わる場所の荒廃に対して懸念していることが伺える。
- 生物相の変化
 - 減少:特にホタル(59 件)、カエル(11 件)について、減っていると感じる意見が比較的多く見られた。
 - 増加:特に、カメムシ(92 件)、ハチ(22 件)、クマ(13 件)等の不快・危険な生きものについて、増えていると感じる意見が多く見られた。

2) 中学生の視点による課題

前述のとおり、全体的には自然に対して肯定的で、活動等に対しても市民より関心が高い中学生だが、「最近では自然の中で遊ばない」という回答が 49.5%と約半数に達しており、自然との接点の減少が最大の課題である。

その要因は以下のとおりである。

- 自然体験に対する関心の低下
 - 自然の中で遊ばない最大の理由は「忙しくて時間がない(54.5%)」で、次いで「他に遊びたいもの(ゲームなど)がある(50.4%)」であった。生活する上で自然との触れ合う時間的な余裕がないこと、幼少期は遊ぶことがあっても、成長に伴う興味の広がりや変化が、自然と触れ合う機会が減少する主要な要因であると考えられる。
- 気軽に立ち入れる自然環境の減少
 - 「遊んでよい場所が分からない(17.9%)」という回答があり、身近に自然があっても、具体的にどこでなら立ち入れるのか、遊べるかが良いかが分からない状況にある。
 - タウンミーティングでも、「子供が外で遊べる場所が減っている」、「規制が多く、遊べる場所が少ない」といった意見があった。

- 危険生物との遭遇懸念
 - 同じく自然の中で遊ばない理由として、「クマ、ハチ、ヤマビルなどの危険な生きものがある（33.3%）」ことが挙げられており、危険生物の存在が、自然との触れ合いを遠ざける要因となっていることが伺える。

2. 市民（市民アンケート・自治協ヒアリング・タウンミーティング）

1) 生物多様性に対する意識

【肯定的な意見】

- 自然環境への満足度
 - 朝来市の自然環境に対して 69.2%が「満足している」と回答しており、中学生と比較して低下するものの、多くの市民が市域の自然に対して肯定的である。満足している理由としては、「自然が豊か」「景色が美しい」「四季がはっきりと感じられる」といった点が多く挙げられていた。
 - 災害が少なく生活しやすいことも、満足な点として多く挙げられていた。
- 自然を感じる場面
 - 「様々な木々や草花など、植物を見かけたとき(62.6%)」が最も多く、日常の景色を通じて、自然環境の良さを感じていることが伺える。
⇒ 中学生は、「川などで遊ぶ(64.3%)」といった体験を通じて自然を感じる事が主流であるのに対して、市民は鑑賞を通じて自然を感じる事が主流である。
 - 「自然に関する印象的な出来事」として、身近な鳥類や昆虫等の小動物との遭遇を挙げる人が多い。具体的な種としては、コウノトリとの遭遇を挙げる人が多く見られた。
- 大切にしたい場所
 - 古城山(竹田城跡)(66.0%)、円山川(63.2%)、畑地・水田などの田園風景(62.0%)が上位を占めていた。
⇒ 「畑地・水田などの田園風景」を挙げる意見が多いのが中学生と異なり、市民は昔ながらの美しい田園風景が失われることへの危機感が強いことが伺える。

【否定的な意見】

- 管理不足に対する不満
 - 中学生の満足度(87.4%)と比較して、市民の満足度は 69.2%に留まった。不満足の原因は、「耕作放棄地の増加」「里山や森林の荒廃」「雑草の繁茂」「外来種の増加」等で、人の手が入らなくなったことによる管理不足が要因となる事項に集中していた。
⇒ 年齢別のクロス集計結果では、60代と70代以上の満足している割合が約65%に留まり、世代別で最低となった。その理由として、「管理不足による里山の荒廃」や「野生動物・ヒルへの不安」などが挙げられており、以前の朝来市の自然環境を知っている高齢の世代ほど、これらの変化を深刻に感じていると考えられる。
- 野生鳥獣や危険生物への恐れ・懸念
 - 生物多様性に関する懸念として、「危険生物(クマ・ハチ等)との遭遇リスク(59.7%)」や「野生動物(シカ・イノシシ等)の増加(52.1%)」が挙げられており、自然の豊かさを感じる一方で、生活を脅かす生きものに対して、強い不安や懸念があることが伺える。

2) 市民の視点による課題

市民が認識する多岐にわたる課題が抽出されたが、大きく分けて「管理放棄による自然環境の減少」「開発等による自然環境の劣化」「一部の野生生物・外来種の増加による悪影響」「在来種の減少」「自然との接点の減少」「専門家・人材の不足」「活動を担う人材の不足」「情報のアクセシビリティ不足」の7つに集約された。

具体的な課題は以下のとおりである。

【管理放棄による自然環境の劣化】

- 里山や農地の荒廃
 - 市民の 51.6%が「人の手が入らなくなったことによる里山や田畑の荒廃」に対して、「非常に問題」だと解答している。自由記述では、耕作放棄地が景観を損なうだけでなく、外来種や有害鳥獣の住処となっていたり、防犯上の不安になっている状況が指摘されている。
- 山林の人工林化と手入れ不足
 - かつての雑木林の多くがスギ・ヒノキの人工林に置き換えられ、子どもの頃と比べて、雑木林がとても少なくなった。
 - 手入れ不足で放置された結果、残された雑木林は藪地化し、人工林は林内の日当たりが悪化し、林床に植物が見られない。
⇒ 森の所有者が代替わりして、森への関心が無くなっているという言及もあった。
- 河川内の土砂堆積と草木の繁茂
 - 河川内に土砂が堆積し、雑木や背丈の高い草(オギやニワウルシと考えられる)が繁茂して、容易に河川に立ち入ることができなくなった。

【開発等による自然環境の劣化】

- 河川の水量低下
 - 円山川水系の支流(特に和田山地域と山東地域)を中心に、以前より水量が減ったという指摘がある(要因として、河床の掘削工事が挙げられる)。

【一部の野生生物・外来種の増加による悪影響】

- 野生生物による被害への懸念
 - シカやイノシシの増えすぎによる農業被害や、生態系への影響等を問題視する市民が多く、身近な環境や生活を脅かす生きものに対して強い懸念があることが伺える。
 - 特にニホンジカは、民家の近くや農地まで出没するようになっており、農作物への被害の他、庭の花まで食べてしまうといった被害が指摘されている。
- 危険生物との遭遇懸念
 - ヤマビル・マダニ・ハチ・クマ等の危険生物との遭遇リスクに対して、強い不安があることが伺える。
 - 特にヤマビルは、以前はほとんど見られなかったが、ニホンジカの増加に伴って、市内全域の山林まで拡大した。地元住民や子どもがヤマビルを忌避し、「山に入る気を失う」という事態を招いている。

- 耕作放棄による外来植物の増加
 - 放棄耕作地の増加に伴い、セイタカアワダチソウやオオキンケイギク、これまでいなかった外来種(と思われる)植物が増加している。
- ヌートリアの再増加
 - 駆除を実施して一時期減少したヌートリアが、再度増加しているという指摘があった。

【在来種の減少】

- 河川改修による生きものの減少
 - 多くの地域で、河川改修(コンクリート三面張り)後、魚類やホタル等の生きものが減少したという指摘があった。
- 身近な生きものの減少
 - 昔は当たり前だった生きものの減少を市民は実感しており、水質汚染や農薬、環境の変化が原因ではないかという不安や寂しさが感じている。
 - ⇒ 減少していると感じる生きものとして、特に意見が多かったのはホタル(220 件)、赤トンボ(44 件)、カエル(40 件)、スズメ(33 件)、セミ(20 件)、ドジョウ(12 件)であった。

【自然との接点の減少】

- 子どもの自然離れ
 - 学校のリスクマネジメントの厳格化、ヤマビル等の危険生物からの忌避、多忙な生活により、自身の幼少期と比較して、子どもたちが自然と触れ合う、自然の中で遊ぶ機会が激減したと感じている。
 - 昔とは違って規制が強く、子どもが気軽に入って遊べるような自然環境が少ないことも、自然離れの一因となっている。
- “自然の恵み”の利用機会の減少
 - 川魚や山菜等の“自然の恵み”を、市民が自分で採って食べることがほとんど無くなり、自然との接点が減少している。
- 自然と関わりのある文化の衰退
 - 「山の神様を祭る」等、自然と関わりのある文化や知恵が、断絶しつつある。

【専門家・人材の減少】

- 指導者の高齢化による観察会等の減少
 - これまで自然観察会を指導してきた専門家が、高齢により活動を継続できなくなったり、安全上の理由でイベントが中止となるケースがあり、子どもたちと自然との接点が失われる一因となっている。

【活動を担う人材の不足】

- 多忙や高齢化による活動の制約
 - 市民が環境保全活動に参加しにくい理由として、「高齢・体力・健康上の理由(15 件)」や「仕事や介護による多忙(16 件)」が比較的多く挙げられており、参加への意欲があっても、身体的・時間的な制約で動けない層が多い状況が伺える。

【情報のアクセシビリティ不足】

- 活動に関する情報のアクセシビリティ不足
 - 保全活動に対して、「どのような取り組みがあるか分からない」「案内を見る機会がない」という意見が散見され、活動意欲があっても参加に結びついていない情報伝達の不足が伺える。

3. 市民団体（環境保全団体、野外活動団体、専門研究機関）

市民団体へのヒアリング内容から、団体が活動する上での障壁を以下のとおり整理した。

- メンバーの高齢化と後継者の不足
 - 「あさごササユリ 21」や「南但馬の自然を考える会」のように、中心メンバーの高齢化と後継者の不在により、活動の縮小や解散に至る状況がある。
⇒ 市民団体のスタッフは朝来市民が中心になっていることから、人材不足には朝来市市民の高齢化・人口減少も関係していると考えられる。
- 活動資金の不足
 - 保全活動や調査をする上で安定した資金確保が難しい。
⇒ 財政面での支援といった要望もあった。
- 活動に対する市民との意識のギャップ
 - 朝来市の市民にとって、豊かな自然は「当たり前」のものであるためか、環境保護・保全を強調する活動に対する関心の低さや、活動しにくい空気感を感じることがある。
- 専門的なアドバイスや知識を学ぶ機会の不足
 - 活動に関して専門的な見地からアドバイスや、活動する上で必要となる、生きものの専門知識、クマへの対処法、救急救命などに関する知識を学ぶ機会への要望がある。
- 市民との交流、協力関係の不足
 - 戦略作成のために今回実施したタウンミーティングのような、様々な世代、立場の市民が、知識やお互いの活動を紹介しあえる交流の場は有意義であり、継続的な開催への期待がある。
 - 地元との連携、協力関係の構築について、行政に支援して欲しいという意見もあった。
- 気軽に立ち入れる自然環境の減少・情報の不足
 - 子どもたちが遊べる場所や、活動を許可してくれる地権者の情報が可視化されておらず、活動する上での障壁となっている。
- 自然環境の変化や危険生物の増加による活動意欲の減少
 - ヤマビルやマダニの増加や、管理不足による林床の藪化により、活動場所に入る心理的ハードルが高くなっている。

4. 事業者

1) 生物多様性に対する意識

- 事業活動と生物多様性との関係性の把握
 - 事業活動と生物多様性保全との関連性について、生物多様性の重要性は認識しているものの、実際の事業活動との結びつきは薄いと考える事業者が過半数(54.9%)を占めていた。
- 生物多様性保全の優先順位
 - 「事業活動が制約されない程度に保全する」という回答が 71.7%と多く、経済活動との両立を前提とした姿勢が目立つ。一方で、「事業活動を優先し、保全は気にしないでよい」という回答は 0%であり、生物多様性への配慮自体は否定されていない。
- 活動の取組状況
 - 取組方針を定めて活動している事業者は 3.2%に留まり、38.7%は方針を定めておらず、特に活動も行っていない。
⇒ 保全活動の内容について、本業を通じたものは少なく、「社員による草刈りやごみ拾いなどのボランティア(58.6%)」といった、地域貢献に近い実践的な活動が主流である。
- 自然の恵み(生態系サービス)の恩恵
 - 事業活動において「供給サービス(食料、水、木材など)」の恩恵を受けていると答えた事業者が 52.7%と過半数を占めていた。これは、朝来市の豊かな自然資源を直接利用している農林業や製造業、飲食業などが一定数存在することを反映していると考えられる。
 - 恩恵を受けているか「わからない」と答えた事業者は 26.4%であるため、多くの事業者は事業活動に何等かの自然の恵み(生態系サービス)を受けていると認識していることが伺える。

2) 事業者の視点による課題

事業者が生物多様性保全に取り組むに当たり、「人手及び予算の不足」「活動内容に関する情報不足」が大きな障壁となっていることが伺えた。加えて、事業活動と生物多様性との関係性についての認識不足も伺えた。

- 人手及び予算の不足
 - 保全活動に取り組むにあたっての最大の課題が「人手の不足(62.1%)」であり、次いで「予算の不足(39.1%)」が挙げられていた。
⇒ 事業の範囲を超える活動が負担となっているため、市からの活動費や物品購入費への補助、人材確保の支援を求める意見もあった。
 - 朝来市と連携した生物多様性保全の取組に対しては、74.1%の事業所が希望しており、活動への意欲が無いわけではないことが伺える。
⇒ 森林や水辺等の保全活動、外来種の駆除活動といった、具体的な活動への関心が高い。

- 活動方法についての情報の不足
 - 約45%の事業者が「どんな取組や活動をすれば良いかが分からない」と回答しており、活動の具体的な方法やノウハウの例示が不足しており、活動に取り組みにくい状況にあることが見て取れる。
 - ⇒ 現在行われている保全活動の多くが、「社員による草刈りやごみ拾い(58.6%)」などのボランティア的活動に偏っており、本業のサプライチェーンを通じた配慮や、製品・サービス自体による貢献は10～17%程度に留まっていることも、活動内容に関する情報の不足が一因であると考えられる。
- 事業活動と生物多様性との関係性に関する認識の不足
 - 過半数(54.9%)の事業者が、生物多様性は重要としながらも「自社の企業活動との関連性は低い」と考えている。
 - 一方で、多くの事業者が「水」などの供給サービスの恩恵を受けていると回答していることから、生態系サービスの基盤となる生物多様性の保全が、事業活動の持続可能性に直結するという認識が十分に浸透していないと考えられる。

5. 有識者

1) 朝来市の自然環境・生物多様性に関する具体的な課題

有識者へのヒアリング内容から、朝来市の自然環境や生物多様性に関する個別具体的な課題について、以下のとおり整理した。

- 河川環境の分断と改変
 - 堰堤やダムによって河川の連続性が途切れ、オオサンショウウオなどの移動や遡上を阻害している。
 - 過去の河川改修によって河川環境が破壊された場所もあり、壊れた自然環境の再生を講じる必要がある。
 - ⇒ オオサンショウウオの産卵場所を破壊している可能性があるにもかかわらず、事前調査や対策が不十分なまま工事が行われている場合が多い。個体を保護するだけでなく、集団（個体群）を維持するという視点での計画が必要だが、そのための基礎資料や保護指針が不足している。
 - 河川の河床を掘り下げているので、地下水位が低下して、結果として河川の水量が低下している。
- 草原及び草原性植物の減少
 - 草原環境は全国的に減少しており、朝来市内に残る草原（粟鹿山山頂、さのう高原、馬場山キャンプ場、南但馬自然学校）はいずれも貴重である。
 - ⇒ 残存する草原はニホンジカの食害を受けているので、豊岡市がやっているように、希少種にゲージをかけて、食害から守る取組みは効果的である。
- 圃場整備や水路の乾田化
 - 圃場整備や水田の乾田化により、水路と河川の繋がりが途絶え、カエルや昆虫などの餌生物の減少を招いている。それがオオサンショウウオ等の捕食者へも影響している。
 - ⇒ 例えば、水路に落ちたカエルが水田に戻れるように改修する等、水田の質の改善は施策として考えられる。
- 森林環境の変化と管理放棄
 - かつての里山管理で成立していた行われていた「切る場所と切らない場所」のモザイク状の環境が失われて生物多様性が低下し、イヌワシなどの大型猛禽類の餌場も減少した。
 - 昭和40年代以降、森林の大部分が単調なスギ・ヒノキの人工林が大部分を占め、手入れが行き届かないことで下層植生が衰退し、森林性の生物は全て減少している。
 - ⇒ 埋土種子の発芽能力の限界を踏まえると、今後10年以内に主伐・再造林をしなければ、森林のサイクルを維持できないだろう。
 - ⇒ 民間企業に、企業活動の一環として木材利用を推進してもらい、森林整備に貢献してもらうことも非常に有効である。
 - 朝来市内は人工林が多いため、残っている二次林はどれも貴重である。

- 耕作放棄や圃場整備による農地生態系の衰退
 - 農業従事者の高齢化によって耕作放棄地が増加しており、農地生態系が維持できるかの端境期にある。耕作放棄地が増加すれば、農地生態系の生きものが軒並み絶滅危惧種となる可能性がある。
 - ⇒ 里地生態系の保全のためには、営農の支援を進めることが一番良い。環境保全型農業の推進だけでなく、営農活動そのものを維持することが生物多様性保全に直結する。
 - ⇒ 耕作放棄地対策として、雑草類を刈った上で冠水させ、復田できる状態にしておく。冠水すれば害虫の発生を抑えられ、景観も良い。ソーラーパネルの用地として売却されるのも防げる。耕作放棄地がある地域の人に謝金を少しずつ払って、草刈りをお願いしても良い。地元住民にも喜ばれる。

- ニホンジカによる生態系への悪影響・環境改変
 - ニホンシカの食害は、朝来市の生物多様性の最も大きな課題の一つである。林床の植物が食べ尽くされることで、森林内が乾燥し、土壌流出による河川生態系への悪影響も懸念される。
 - 林床だけでなく、食害によって畦畔の雑草が減少し、食草や蜜源が失われた結果、兵庫県西北部一帯でチョウが減少している。
 - 一方でアメリカオニアザミ、ジャケツイバラなど、シカが食べない種が増加している。

- 外来種の増加による在来種への悪影響
 - 外来種のアライグマの個体数が増加しており、アライグマがイシガメやサンショウウオを捕食する被害が顕在化している。
 - 外来種のニワウルシ(シンジュ)が、河川敷や山地で激増している。ニホンジカが食べないことが増加に拍車をかけている。兵庫県内の他の市町村と比較して朝来市内での増加は著しい。
 - 円山川水系ではアカミミガメやアメリカザリガニが多く、在来種への影響が懸念される。
 - クビアカツヤカミキリやナガエツルノゲイトウ等、新たに侵略的な外来種が市域に侵入してきた際の対応を決めておく必要がある。

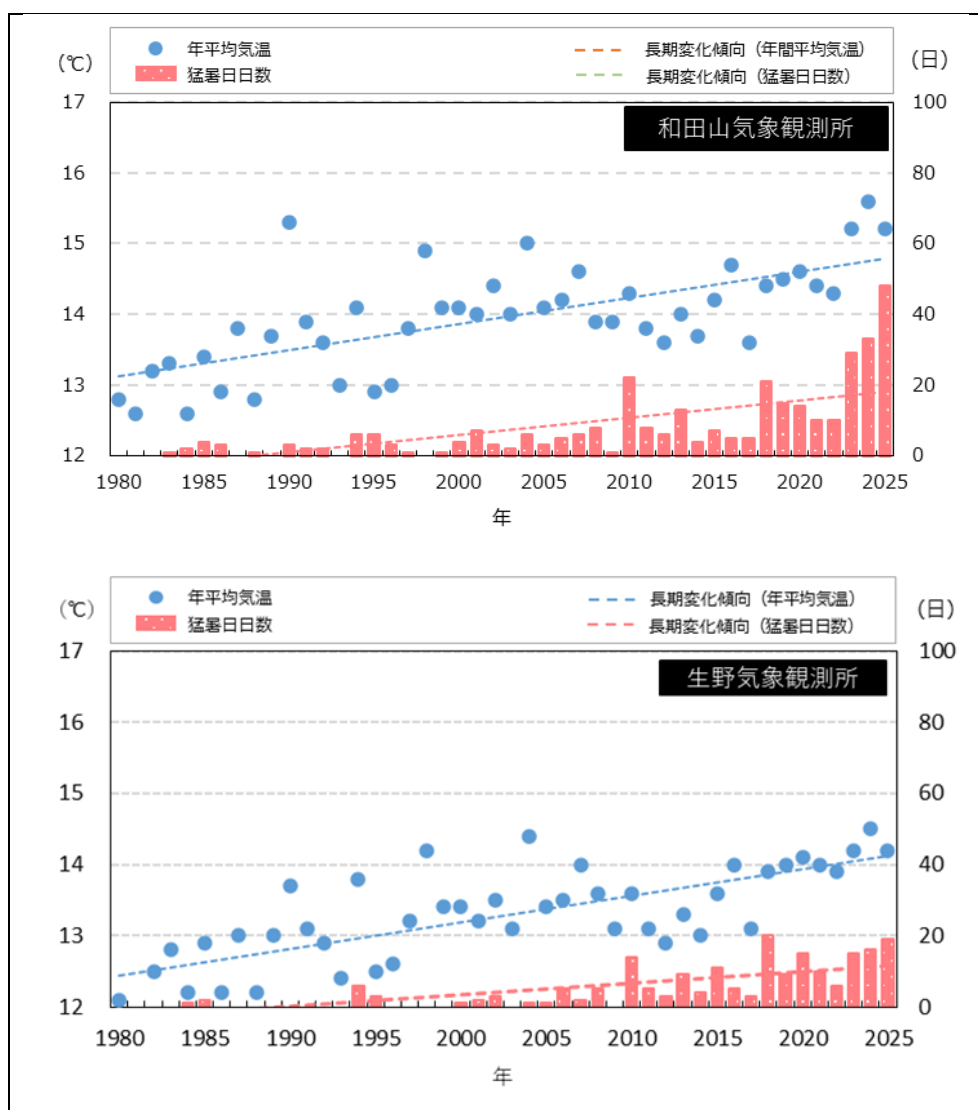
- 自然環境や生きものの分布状況に関するデータの不足
 - 市内の自然環境の状況や、希少種の分布に関する情報が、十分に把握・整理されていない。
 - ⇒ 市内における希少種の分布情報を庁内で整理して、環境部局だけでなく、建設課や農政課、観光課などの各部局で情報を共有し、工事や事業の計画段階で事前に調整できる仕組みを構築することが、「戦略」の実行力を担保することになる。

- 鎮守の森の保全
 - 神社の鎮守の森(照葉樹林)は、小規模ながら重要な生物の拠点となっている可能性があるが、現況が把握できておらず、そのまま改変・消失していく恐れがある。

6. 既存資料

既存資料から抽出した、朝来市の生物多様性に係る課題は以下のとおりである。

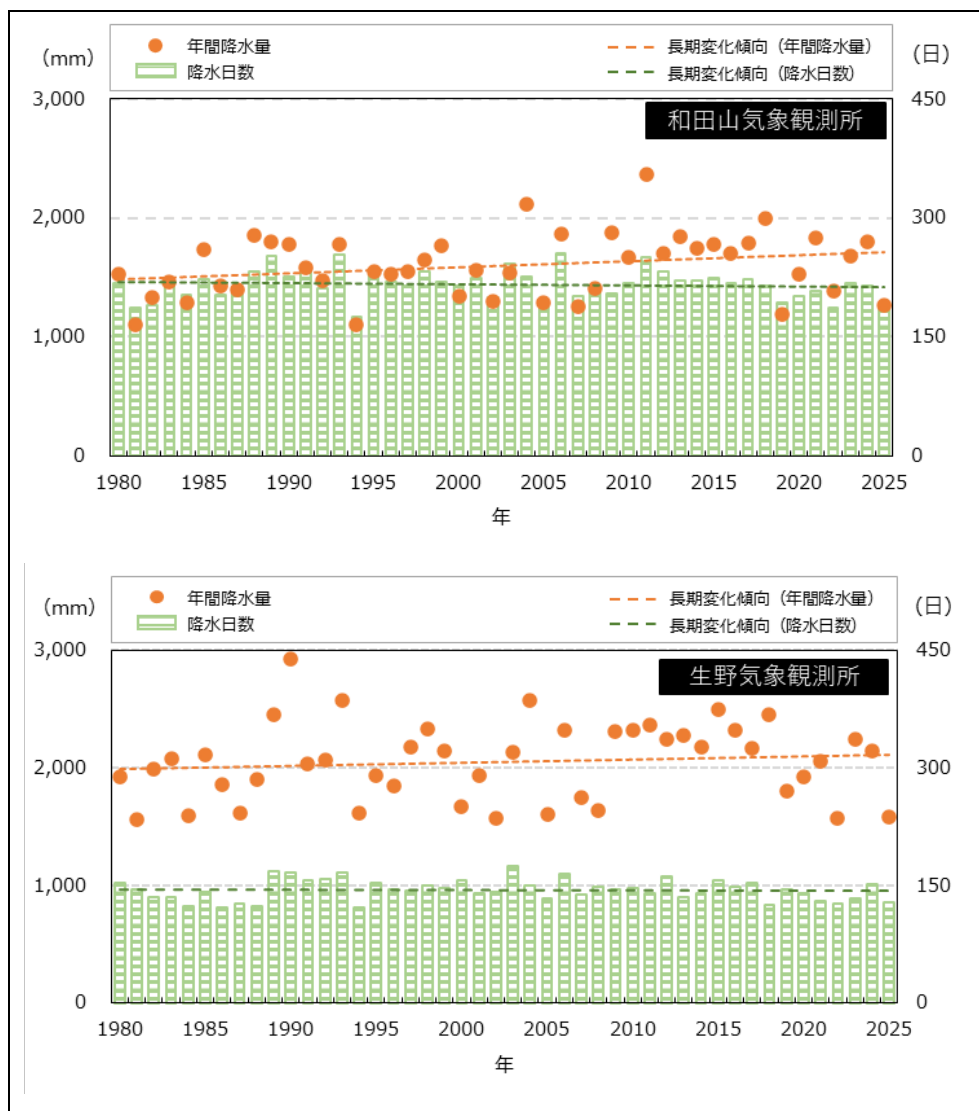
- 年平均気温の上昇及び猛暑日日数の増加
 - 市内の和田山気象観測所及び生野気象観測所における 1980 年以降の年平均気温及び猛暑日(日最高気温が 35℃ 以上の日)日数の長期変化傾向を見ると(図1)、ともに増加傾向で推移しており、気候の温暖化が進行していることが見て取れる。
 - 特に 2023~2025 年にかけては、2022 年以前より年平均気温が大きく上昇し、猛暑日日数は大きく増加した。



データの出典: 気象庁ホームページ

図1 年平均気温及び猛暑日日数の推移

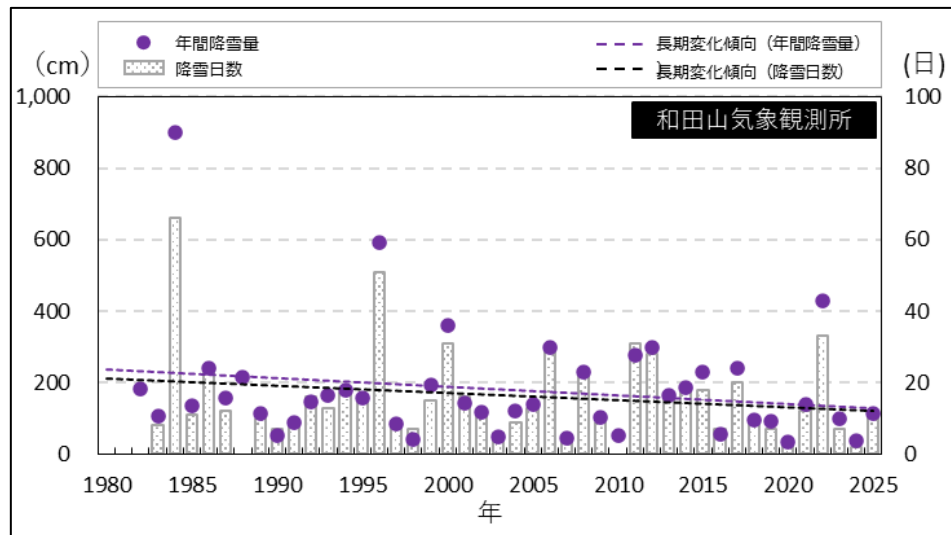
- 年間降水量の増加及び降水日数の減少
 - 市内の和田山気象観測所及び生野気象観測所における 1980 年以降の年間降水量及び降水日数の長期変化傾向を見ると(図2)、降水日数が減少傾向で推移する一方で、年間降水量は増加傾向で推移しており、短い時間に激しい降雨がある形に雨の降り方が変化していることが見て取れる。
 - ⇒ 有識者や自治協ヒアリングでも、「雨の降り方が変わって川の水位が安定しなくなった」という意見もあった。



データの出典: 気象庁ホームページ

図2 年間降水量及び降水日数の推移

- 年間降雪量及び降雪日数の減少
 - 市内の和田山気象観測所(生野気象観測所では観測対象外)における1980年以降の年間降雪量及び降雪日数の長期変化傾向を見ると(図3)、ともに減少傾向で推移している。

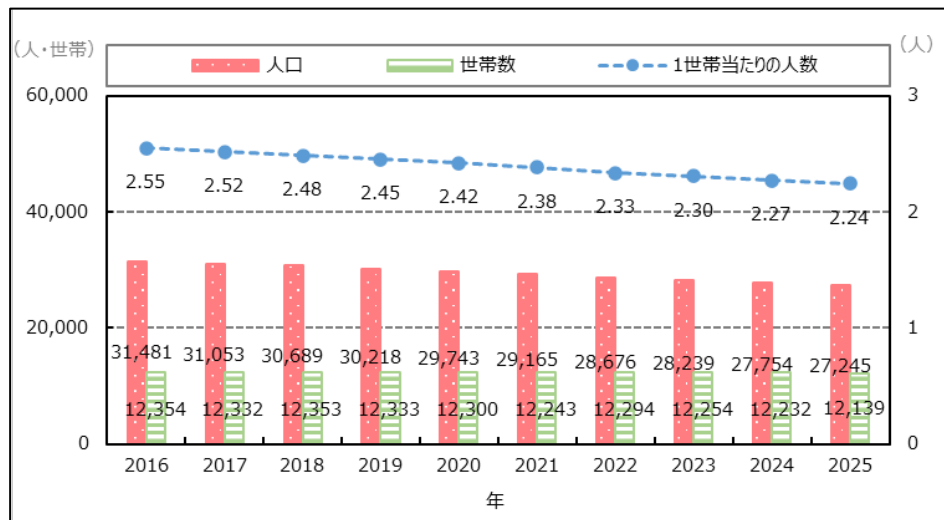


データの出典:気象庁ホームページ

図3 年間降雪量及び降雪日数の推移

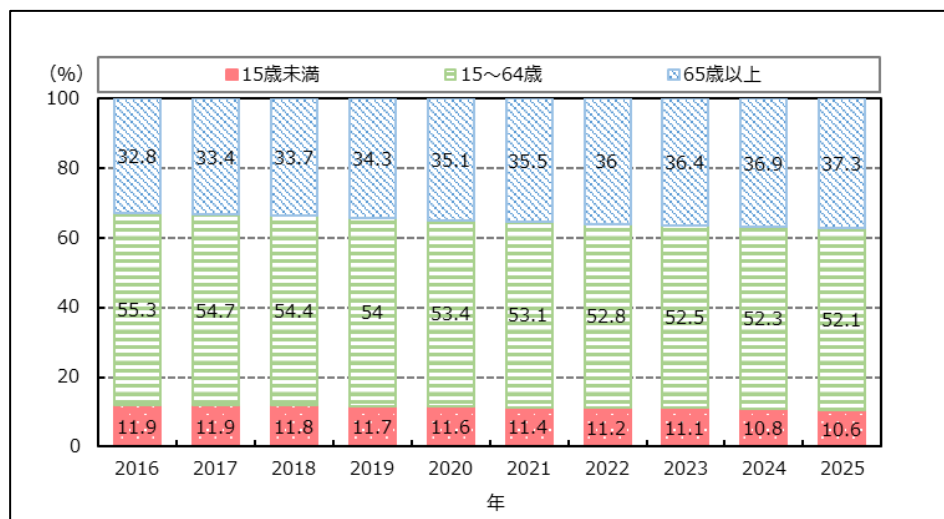
- 人口の減少及び少子高齢化

- 本市の人口は減少傾向にあり、世帯数は概ね横ばいで推移している(図4)。1 世帯あたりの人数は減少傾向で推移していることから、核家族化や単身世帯化が進行していることが見て取れる。
- また、本市の人口の年齢階級別構成比は、15 歳未満及び 15～64 歳が減少傾向で推移する一方で、65 歳以上が増加傾向で推移しており(図5)、少子高齢化が進行していることが見て取れる。



データの出典:朝来市オープンデータカタログサイト

図4 人口及び世帯数の推移

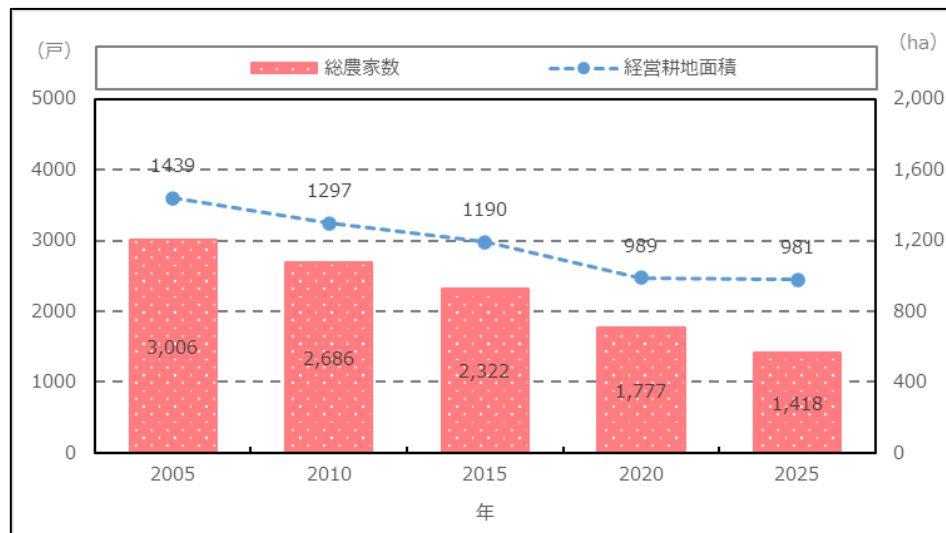


データの出典:朝来市オープンデータカタログサイト

図5 人口の年齢階級別構成比の推移

- 総農家数及び経営農地面積の減少

- 本市の総農家数は、2020 年から 2025 年にかけては横ばいであるものの、基本的には減少傾向で推移している。経営耕地面積は、2025 年まで一貫して減少傾向で推移しており（図6）、農地生態系を支える農地や農業の担い手が共に減少していることが見て取れる。



データの出典：兵庫県農林業センサス

図6 総農家数及び経営耕地面積の推移

- 都市化による水田環境の減少

- 1976 年と 2024 年の土地利用・被覆状況を比較すると（図7）、市街地（1976 年の凡例では建物用地、2024 年の凡例では人工構造物）の面積は、1976 年から 2024 年にかけて約 225%に増加した。一方で水田面積は、1976 年の約 39%にまで大きく減少しており、都市化が進行して市街地が拡大した結果、水田環境は開発されて大幅に減少したことが見て取れる。

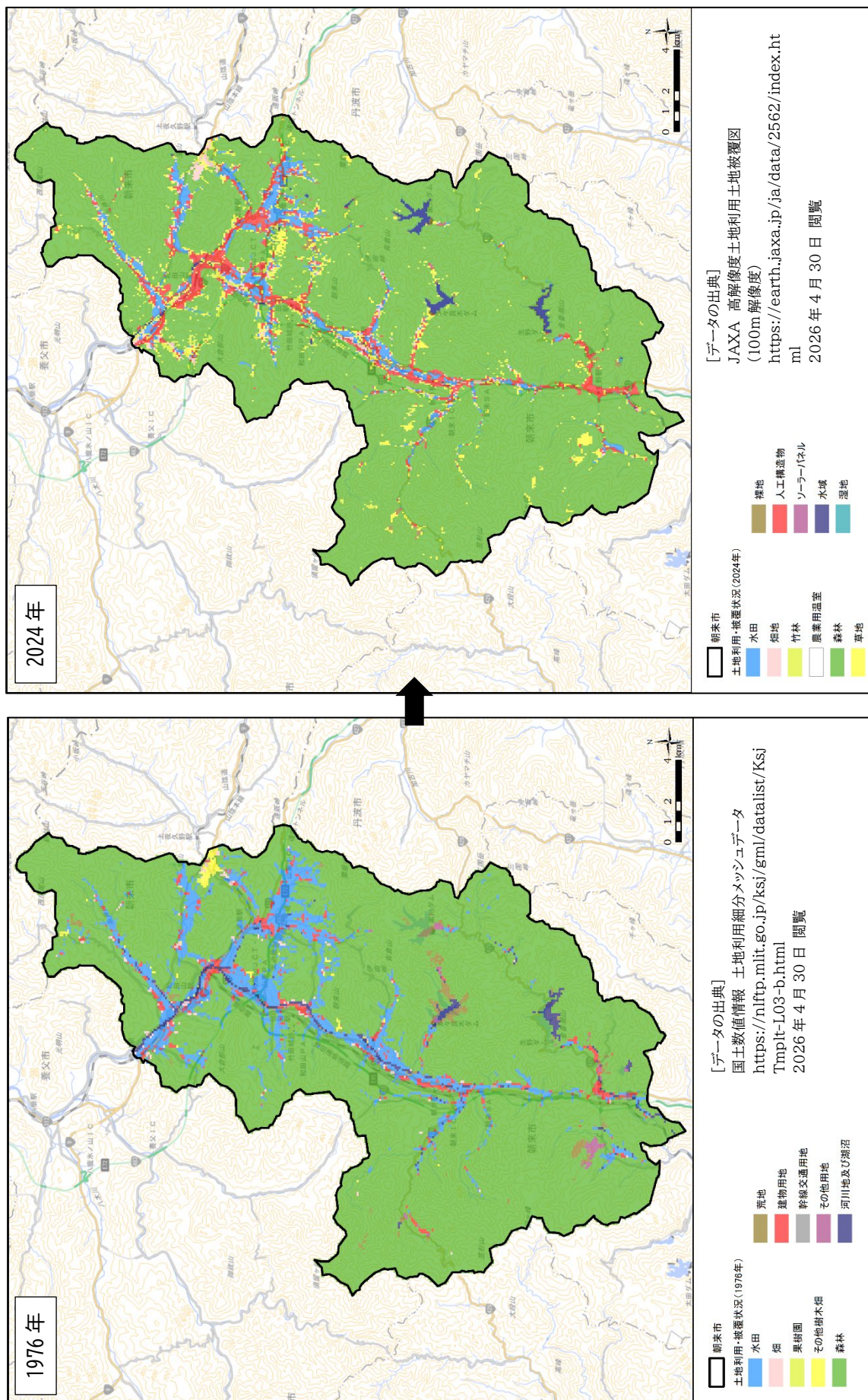


図7 土地利用・被覆状況の変化(1976年・2024年)

●草地環境の喪失

2023 年度に朝来市が実施した生物多様性啓発推進事業「朝来市一斉！消えた草原調査」の結果、かつては市内の 72 カ所に草地があったが、現存するものは 4 箇所に留まることが判明した（河川敷や休耕田が草地化したものは除外）。

現存する4か所は、さのう高原パラグライダー場、馬場山キャンプ場、南但馬自然学校、粟鹿山8合目の畑ガ平草原（ため池周辺）である。

草地の消滅の要因としては、かつては1戸に1頭飼育され貴重な労力を担っていた但馬牛が、1960年代前後で耕運機が普及して飼育されなくなったことが大きいと考えられる。共同草地はその役目を終え、宅地、森林（植林、放置による遷移）、キャンプ場、教育施設（自然学校等）に姿を変えた。また、ダムの建設により集落とともに水面下に没したものもある。

情報の出典：日本農業遺産「岩津ねぎを核とした資源循環型農業システム＝伝統種子の継承と地域連携による里地里山保全＝」地域概況書